

巻頭言

中国での国際ワークショップ

佐野勝宏（教授）

つい先日（2023年11月2日～9日）、中国に行ってきた。中国科学院の古脊椎動物・古人類学研究所（IVPP）のShi-Xia Yang博士が、国際ワークショップを開催し、私とスペインのカタルーニャ人類古生態・社会進化研究所（IPHES）のAndreu Ollé博士に声をかけてくれたのだ。

最初の3日間は、北京中心部にあるIVPPで136万年前から2万年前の様々な重要遺跡から出土した石器を実見した。その後、北京原人化石が出土したことで有名な周口店遺跡と泥河湾盆地の前期旧石器時代遺跡の巡検に向かった。周口店遺跡（写真）は、北京から南西に48kmの地点にあり、1987年にユネスコの世界文化遺産に登録された。1929年に最初の原人頭蓋が見つかった周口店遺跡第1地点の堆積層は40mに及び、最下層の年代は約78万年前とされる。その名の通り山の頂きにある山頂洞地点（約4～3万年前のホモ・サピエンス化石が出土）に行き最下部を望むと足がすくむ程高く、長大な人類史と一世紀に及ぶ調査の歴史を感じた。

周口店と泥河湾での巡検を終え北京に戻ると、北京郊外にある中国科学院大学で顕微鏡を使った石器使用痕分析のワークショップが行われた。ここには、ライカとキーエンスの最新のデジタルマイクロスコップが揃っていた。中国には本格的に使用痕分析を行う研究者はいないが、ヨーロッパでの研究経験を持つYang博士はその重要性を感じ、必要な機器を揃え今回のワークショップを開いた。遺跡から出土した石器の使用痕を観察しながら、Ollé博士や私が、石器使用痕分析の方法をIVPP、IPHES、



周口店遺跡にある北京原人の像

CNEASの学生やIVPPの研究者に説明した。ワークショップでは、今後の共同研究についても話し合われた。これを機会に、3機関の若手研究者が国際共同研究を展開できる環境を整えることができたらと考えている。

今回、私にとっては初めての中国訪問であったが、圧倒され続けた滞在であった。雄大な自然の中にたえず50m級の層序をもつ遺跡群もさることながら、IVPPや中国科学院大学の予算規模の大きさは想像を超えるものであった。一方で、気懸かりなこともある。私の知り合いのIVPPの研究者は、ここ数年で2名もIVPPを去り、北京大学等の他の大学に移った。理由は、IVPPの厳しい業績課題にあるようだ。Yang博士は、30代半ばでNature、Science誌に複数の論文を発表しているが、IVPPではそのような成果が求められている。使用痕分析は、トレーニングだけで最低半年はかかり、石器1点の分析でも1時間から1日はかかる。多くの論文業績が求められるアメリカでは、とうの昔に使用痕研究者はいなくなった。中国で使用痕研究者は育つのか？ 共同研究を通じ、今後しばらくその動向を見守ることになるだろう。



contents

- | | |
|-------------|-----------------------|
| 1 巻頭言 | 5 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか |
| 2 私の東北アジア研究 | 7 著書・論文紹介 |
| 3 新任ごあいさつ | 8 活動風景 |

私の東北アジア研究

オーラルヒストリーによる戦争記憶研究

石井弓

中国研究分野／准教授



現在進行しているロシア・ウクライナ、そしてイスラエル・パレスチナの紛争の背景には、語り継がれる過去の記憶があると言われる。プーチンがウクライナを「ネオナチ」と呼ぶのは、かつてのドイツによるロシアやベラルーシへの侵攻や虐殺の記憶に訴えようとするものだし、イスラエルとパレスチナの対立は、紀元前に始まる宗教や領土を巡る争いに起因していることは広く知られる通りである。私は中国をフィールドに、戦争の記憶がどのように表象され、内面化されてきたのかを研究してきたが、中国では、日中戦争が、戦勝記念日や柳条湖事件(満州事変)記念日などに想起されるほか、四川省・汶川大地震での自衛隊機の派遣拒否(2008年)、サッカーアジアカップでの暴動(2010年)、度重なる日本製品不買運動によって繰り返し想起され、日本への反発に結び付いてきた。政治が記憶を利用した面もあるが、時に為政者の意図を超えて、戦争記憶は現在を生きる人々を動かしてきたと言える。

戦争記憶の研究は、北京への留学経験をきっかけにしている。1997年、抗日戦争勝利50周年が国を挙げて祝われた翌々年、私は北京へ留学し、国境をまたいだけで人々の歴史観や記憶がガラリと変わったと感じた。特に衝撃的だったのが、同世代の中国人があたかも戦争を経験したかのように感情的に語ることであった。政治や教育の影響か、家庭で語り伝えられるためか、それとも私自身の認識や感覚が偏っているのか。日本とあまりに違う記憶のありようは、戸惑わずにいられないものだった。戦後生まれの日本人として、中国人の戦争記憶をどう理解することができるのか。こうしたテーマを抱えて、私はオーラルヒストリー調査を行うために、日中戦争の最前線であった山西省に入ることとなった。



山西省孟県の調査村のひとつ。黄土高原に位置し、人々は窑洞(ヤオトン)と呼ばれる横穴式の住居に住む。

現地でのインタビューでは、農民たちの戦争体験が聞き取られ、戦後の政治運動や教育活動が戦争を題材とするたびに、過去の記憶が呼び起され、村人たちが繰り返し傷ついてきたことが分かってきた。中国共産党が掲げる戦争の歴史に対して、最前線の村々では、村で起こったことが詳細に語り継がれ、一方で、性暴力被害者や対敵協力者(漢奸)のような複雑な立場は、語ることでできない経験として忘却の淵にあるという、歴史や記憶の多層性も見出された。戦後中国では、複数の「鎮圧運動」で対敵協力者が標的にされ、その存在が記録としても身体的にも排除されたためだ。このような戦争記憶は、土地改革や戦後の様々な政治運動の中でも繰り返し言及されたことから、戦争は戦後の歴史と深く関連しつつ、今を生きる人々に記憶されてきたのだった。こうした内容は、拙著『記憶としての日中戦争』(2013)にまとめたのでご参照頂きたい。

日本人として村々にインタビューに入ることは、意外にも歓迎された。過去の侵略者に伝えたいことや、外部の人間に話したいことが、村にはたくさんあったからだ。中には数十年間秘匿していた性暴力被害の経験を初めて語るおばあさんもあり、聞き取りは責任を伴った。戦後世代も含め、多様なインタビューの中で分かってきたのは、対話を通して聞き手の側の思考やアイ

デンティティが常に少しずつ変容していて、100人もインタビューをすると、聞き手が以前とは異なる考え方を持った別人格のようになるということであった。私の場合、中国人がどうして戦争をそのように記憶するのかを、理解できると感じるようになっていた。その理解は客観的でもなく、主観的でもなく、自分が変化したとしか言いようがない。こうして、他者理解は自己変容によって成り立つということをインタビューから感じ、研究の中で常に反芻してきた。

いまや日中戦争は、次世代がいかに関心を継承しているのかを問う段階に入っている。人文学では、こうした記憶を集会的記憶や文化的記憶という、集団共有の側面から考察してきた。ここでは、個人間あるいは世代間での記憶継承が問題となる。そのため人文学のみならず精神医学や心理学の観点からの分析が緊要である。目下のところ、センターの助成を受けて始めた共同研究では、心理学の専門家に参加してもらい、「歴史・心理学」の側面から戦争記憶の国際比較研究を行っている。中国で考えてきた戦争記憶の問題を、今後は視野を広げて比較の観点から考えていきたい。



屋外での聞き取りの様子。

いしいゆみ 愛知県出身。学術博士(東京大学)。研究テーマ：戦争記憶、華北農村コミュニティ論、東西交流史。著書に『記憶としての日中戦争』(研文出版、2013)、共著に『変容する記憶と追悼』(岩波書店、2022)など。

#1



Charlotte Marchina

客員准教授
[2023.11.1～2024.1.31]

シャルロット・マルキナ ▶ フランス国立
東洋言語文化学院准教授

モンゴルとシベリアのマルチスピーシーズ人類学

text: 高倉浩樹

シャルロット・マルキナ先生の紹介をします。彼女は社会人類学者として、モンゴル及び南シベリアで牧畜文化を研究しています。2008年から2016年にわたる現地調査を踏まえて、2021年には単著「Nomadic pastoralism among the Mongol herders: Multispecies and spatial ethnography in Mongolia and Transbaikalia」をアムステルダム大学出版会から刊行しました。民族誌的観察とGPS追跡データを統合することで、多種類の動物と人間との多様な関係の適応性を議論し、マルチスピーシーズ人類学に新たな問題提起をしました。モンゴルとロシア双方で調査をしているという点も大きな特徴です。彼女のグループが執筆した北アジア牧畜論に関わる論文が国際誌「Current Anthropology」誌に掲載された際に、論文に続けて掲載される公開コメントへの寄稿する機会を得たことで私は彼女と知り合いになりました。その後、幾つかの会議などで交流してきましたが、この度彼女を受け入れることができて大変うれしく思っています。マルキナ先生は、所属先大学ではモンゴル語学科の主任を務めるなど、フランスにおけるモンゴル研究において重要な役割を担っています。

近世日本人のロシア知識を仙台で探る

今年11月1日から客員准教授として着任いたしましたシェプキン・ワシーリーです。2007年にイルクーツク言語大学日本語学科を卒業した後、ロシア科学アカデミー東洋古典籍研究所（サンクトペテルブルク市）の歴史資料科学博士課程に進み、2011年に博士号を取得して同研究所に勤めています。研究テーマは日露関係史、特に近世日本と帝政ロシアの交流史です。また日露交流史におけるアイヌ民族の位置・役割も研究しています。近世日本のロシアに対する態度を把握するにはその対外政策、対外知識、思想なども考慮しなければならないと思い、研究してきました。当センターでは、上記のテーマを進め、とくに19世紀前半のロシア関連知識普及やその対外政策・思想への影響を研究したいと思います。近世日本におけるロシアの知識や討究というと、まずは林子平や工藤平助という、仙台藩に深い関わりを持つ人物が頭に浮かぶでしょう。仙台にいて、この二人の思想を継承した蘭学者や水戸学の思想家の遺稿をよりよく理解できると期待しています。



SHCHEPKIN Vasilii

上廣歴史資料科学研究部門／
客員准教授
[2023.11.1～2023.12.31]

シェプキン・ワシーリー ▶ ロシア・イル
クーツク生まれ。博士（史学）。ロシア科
学アカデミー東洋古典籍研究所上級研究
員。専門は日本近世史、日露関係史。

#3



クタフェヴァ・ナタリーヤ

モンゴル中央アジア研究分野／
教授

クタフェヴァ・ナタリーヤ ▶ 学士、ノボ
シビルスク国立大学。修士、ノボシビル
スク国立大学大学院。PhD、モスクワ東
洋研究所。

日本語の専門書における複数形の表現

ロシアのノボシビルスク市から来ました。ノボシビルスク市は西シベリアの南部に位置する都市です。ノボシビルスク中心部から約30キロメートル離れたアカデムゴドロクには、ノボシビルスク国立大学や、科学アカデミーの約30の研究所があります。私はノボシビルスク国立大学の人文学部東洋学科で働いています。同時に日本語センターの所長でもあります。今年は東洋学科で言語学、文化言語学および初級日本語のコースを教えています。私の研究テーマは、日本語の専門書における複数形の表現です。ロシア語には数の文法的なカテゴリーがあり、さらに主語と述語の間に数の一致があります。これに対して日本語にはこの現象がなく、そのため、単数が複数か分かりにくいという特徴があります。そこで私は、この問題を次の三つの面から研究しています。

1. 標準日本語で数量を表現する方法を調べること
2. これらの方法のうちどれが専門書で使用されているかを調べること
3. 標準日本語と専門書における数量の表現を比較した論文を書くこと

#4



Ria-Maria Adams

客員研究員
〔2023.10.1～2023.10.31〕

リア＝マリア・アダムズ ▶ ウィーン大学
社会文化人類学部研究員

北欧北極における縮小する地域社会とウェルビーイング

text: 高倉浩樹

リア＝マリア・アダムズさんを紹介합니다。彼女は社会人類学者として、北極地域社会のウェルビーイングやインフラを研究しています。現在、センターで受託している北極域研究加速プロジェクト (ArCS II) の一つとしてフィンランド・ラップランド大学との交流事業をおこなっており、次世代研究者として東北大に滞在しました。研究テーマは、「縮小するコミュニティとインフラ―北極と東アジアの比較」です。彼女の所属は現在ウィーン大学ですが、この事業が始まった当時はラップランド大学が本所属で、現在でもクロスアポイントとなっています。10月11日には、受け入れ教員の高倉の大学院ゼミで発表をしてもらいました。10月13日には事業メンバーである神戸大学の太石侑香准教授が企画した「東アジアと北極における移民のウェルビーイング」セミナーで「Perceptions of wellbeing among young lifestyle migrants in Finnish Lapland: mobility, place & temporality」の発表をしてもらいました。日本の少子高齢化と移民政策に関心をもっており比較研究をしたいと話しています。

トランスナショナルな実践とアイデンティティ

私はこれまで、ポストコロニアルな状況、冷戦と祖国の分断、またグローバリゼーションという状況のもとで、東アジア社会の各地に離散し、取り残されたコリアンの移動とアイデンティティの形成・変容の過程に着目した研究を行ってきました。これまでの研究は、コリアン・チャイニーズ (朝鮮族) に焦点が当てられています。私は中国生まれのコリアン (移民4世) であり、10歳から4年を韓国で過ごしてから、再び中国に戻って暮らし、大学卒業後は日本で学業を継続しました。このような文化的背景と移動の経験から、コリアンの移動性に関心を持ち、中朝国境におけるトランスナショナルな移動と実践に関わった人びとを対象にインタビュー調査を行いました。その中で、朝鮮族の国境を越えて行う多元的生活実践「ポッターチャンサ」に着目し、複数の国家に帰属する多元的意識の形成をトランスナショナルリズムの文脈の中で検討してきました。今後の研究ではフィールドを拡張し、比較研究に取り組むことによって議論を深めていきたいと考えています。

#5

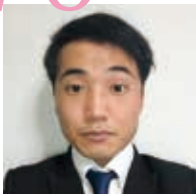


朴 歆

専門研究員

パク・ファン ▶ 2023年東北大学大学院
博士後期課程修了。博士(学術)。専攻は
文化人類学。

#6



金 来

モンゴル中央アジア研究分野/
専門研究員

きん・らい ▶ 東北大学大学院環境科学
研究科先端環境創成学専攻博士後期課
程を修了。2023年10月より着任。

清代モンゴルにおける資源利用の研究

私はこれまで、清代モンゴルにおける資源利用の研究を行ってきました。今モンゴルはまさに資源供給基地として重視されています。そのため鉱物資源開発の歴史的あり方に関する研究は、現在のモンゴル地域の経済、政治、社会など様々な分野を理解する一つの重要なテーマです。モンゴルでの鉱物資源の採掘・販売が始まったのは清代であり、現代モンゴルの資源開発の状況やこれへのモンゴル人の態度を理解する上で、歴史上の資源に関する研究は不可欠の課題となっています。

清代のモンゴルはそれ以前の時代と違って、比較的安定した時代だったため、各衙門で大量の文書が作成されるようになり、その一部が史料集として刊行されています。私は清代のアラシャ旗を事例に同旗の文書史料を使用して旗内での塩湖資源の利用を中心に研究を行ってきました。これからは、対象地域をさらに拡大するなどして清代モンゴル資源問題の研究を行いたいのです。どうぞよろしくお願い致します。

大河原町文化財企画展

佐藤屋の歴史資料と所蔵の品々



荒武賢一朗

(上廣歴史資料学研究部門／教授)

会期 2023年10月13日～15日

会場 佐藤屋邸、大河原町中央公民館(宮城県大河原町)

上

廣歴史資料学研究部門では2019年度より大河原町教育委員会と共同で歴史資料保全活動を進めている。今回は国登録有形文化財佐藤屋邸および大河原町中央公民館を会場に、成果を発信する企画展を開催した。佐藤屋邸では、調査の過程で発見された道具類や屏風、古写真などを展示し、5代目佐藤源三郎の文書や、7代目源三郎の撮

影した映像も披露された。中央公民館では近世の書籍や明治期の日誌をパネルおよび原本で紹介した。14日午後には「大河原町文化財講演会」(中央公民館大ホール)で、佐藤源之氏(東北大学名誉教授、佐藤屋9代目当主)と荒武賢一朗が講師を務め、文化財保護や歴史資料分析についての知見を深め、来場者各位にその重要性を伝えることができた。



展示資料 佐藤屋の暖簾(のれん)

白石城パネル企画展

片倉氏と江戸時代の白石城



荒武賢一朗

(上廣歴史資料学研究部門／教授)

会期 2023年10月6日～12月20日

会場 白石城、白石城歴史探訪ミュージアム(宮城県白石市)



片倉小十郎景綱の肖像

上

廣歴史資料学研究部門と白石市教育委員会博物館建設準備室は、現在の白石市域における歴史資料調査を継続しつつ、その成果の発信に努めてきた。今回は白石城三階櫓(天守閣)の第3層(3階)でパネル展示を、近隣の白石城歴史探訪ミュージアム2階展示室において資料原本の展示を実施した。パネルでは、江戸時代を通して白石城主

を務めた片倉氏歴代当主の資料をはじめ、白石城の火災やその復興過程などに焦点を当てた。2階展示室では、片倉小十郎村定(6代)の手紙や、白石市内に伝来した片倉氏の家臣(武士)や町人、百姓たちの記録を披露している。開催期間中には白石城周辺でイベントがあったことも手伝い、多くの来場者に展示を御覧いただくことができた。

報告会

東北大学東北アジア研究センター 研究成果報告会 2022



後藤章夫

(地球化学研究分野／助教)

会期 2023年9月27日

会場 東北大学片平キャンパス 片平北門会館 2F エスパス

セ

ンターで実施されている共同研究の成果報告会が、昨年に引き続き対面で実施され、公募共同研究を含めた13件の報告があった。

センターの多様な研究対象を反映し、報告は火山活動や生物多様性などの自然科学、古代の人類移動や文化伝播に関する考古学、歴史資料に基づく地域史や国際交流史、墓石や墓碑銘を用いたロシアでの

イスラーム信仰の研究、在日外国人の社会統合と地理的要因との関連、農業の持続可能性に対する人類学的研究と多岐にわたり、標本やデジタル化された学術データの活用や公開手法に関する報告も複数件あった。

オンライン時代からの反動か、対面での議論は大いに盛り上がり、質疑応答が長引いたことで予定を30分ほど超過しての閉会となった。



報告会の様子

研修

宮城第一高校研修プログラム



木村一貴

(地域生態系研究分野／助教)

会期 2023年9月29日

会場 東北アジア研究センター(仙台市)

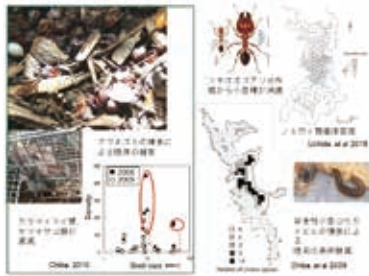
宮

城第一高校から依頼を受け、同校の国際探究科と理数探究科の一年生約80名に対する研修プログラムを昨年に続いて実施した。本センターからは基礎研究部門の6つの研究室に上廣歴史資料科学研究部門を加えた7グループが、研究活動の解説等を行った。

私のいる地域生態系研究分野では、生物の多様性が創出されるメカニズム・北東アジアの生態系の独自性に関する内容に加えて、生態系が人間社会にもた

らすサービス・絶滅危惧種の保全・外来種の駆除に関する話題を紹介した。近年ニュース等で耳にする機会が増えたせい、学生からは生物多様性・生態系を保全することの意義や、その困難さに関する意見・質問が多く出された。

たった半日ではあったものの、幅広い研究分野を抱える本センターでの研修が両探究科の目指す「高度な探究活動」を推進できる人材の育成に少しでも貢献できたなら幸いである。



地域生態系研究分野での研修に用いたスライド

ワークショップ

持続可能なデジタルアーカイブにむけて



田村光平

(環境情報科学研究分野／准教授)

会期 2023年7月24日・25日

会場 東北大学 CAHE ラウンジ・建築 CLT モデル実証棟

2

2023年7月24日に、「Building a Database for Quantitative Cultural Analyses」、25日に「Disentangling the Evolution of Political Complexity」と題した国際ワークショップを開催した。どちらも、ニュースレター98号で紹介したトム・カリリー氏の来日に合わせて実行され、デジタルアーカイブ(DA)や蓄積されたデータの活用についてのイベントである。前者は、総合図書館の後援を受けDA委員会の事業として実施された。中分遥氏もお招きし、DAの構築や

活用のための課題を語って頂いた。後者は、有松唯氏、セドリック・ペレ氏、辻田淳一郎氏も招待し、前方後円墳の大規模データ解析と、考古学における古墳時代の社会の複雑化のモデルとの対応が議論された。学術的にも政策的にも、DAの推進が掲げられるものの、その活用や持続可能性については見通しが明瞭ではない。前者の議論のなかで、DAの公開や維持管理は国際的にも若手のキャリアにつながりづらい、という課題が共有された。



「Disentangling the Evolution of Political Complexity」の様子

ウェブインタビュー記事

タイガに生きる人々の暮らしと文化を知り、他者理解の醍醐味を広める

text: 後藤章夫

東

北アジア研究センターの受託研究である北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)に関わるアウトリーチ活動として、ウェブメディアesse-senseに高倉浩樹教授のインタビュー記事が掲載された。シベリアの少数民族やトナカイ遊牧の調査を続けてきた高倉教授の体験談がふんだんに盛り込まれ、研究におけるものの見方、研究者としての経緯などを知れるほ

か、論文や教科書とは違った生の言葉からは、研究の醍醐味が伝わってくる。ぜひご覧いただきたい。



esse-sense インタビュー 記事

<https://esse-sense.com/articles/106>



ISBN 9784642068826

毛利家 ―萩藩―

根本みなみ 著 吉川弘文館 2023年6月刊

text: 根本みなみ

本書で検討対象とした萩藩毛利家は鎌倉幕府重臣として活躍した大江広元から始まり、三浦合戦で一人生き残った毛利経光が越後国に土着し、その子孫が安芸国に移り住み、国人領主として成長したという長い歴史を持つ家である。しかし、戦国大名である毛利元就の活躍と関ヶ原での敗戦、そして幕末維新期の華々しい動向が目立つ一方で、「幕藩体制下における一大名家としての毛利家の動向」という点は、長

らく注目されないままとなっていた。そこで本書では、江戸時代を通じて数多くの危機に直面しながら、大名や家臣、さらには大名の正室をはじめとする女性たちが、様々な人脈や手段を用いて毛利家という「御家」を存続させるために奔走し、心血を注いだ姿を明らかにすることを通じて、「一大名家としての毛利家が幕藩体制下でいかにして生き残ったか」という点から萩藩毛利家の姿を描き出すことを目指した。



ISBN 978-4-908203-32-9

江戸時代の漂流記と漂流民 ― 漂流年表と漂流記目録 ―

平川新・竹原万雄 共編 蕃山房 2023年9月刊

text: 竹原万雄

江戸時代の日本は「漂流の時代」といわれるほど船の漂流が多かったが、その全体像は十分に把握されていない。本書では、従来刊行されてきた漂流記集や漂流記文献目録等を可能な限り調査し、漂流事件や漂流記の全数把握を試みた。その結果、341件の漂流事件を確認し、漂流年・船名・漂着地・帰国ルートなどの項目を設けた「漂流年表」としてまとめ、各漂流事件の根拠となるデータを「漂流記目録」として収

録した。さらに341件に分類することが困難であった漂流記等をまとめた「未分類漂流記」、複数の漂流記を収めた「漂流記集」を収録し、漂流記の全体像が把握しやすいようにした。加えて、上記データを分析した概論「漂流の諸相」、「開国以前の漂流民と日露関係」等、5本の論説を収録している。本書が江戸時代の漂流事件および漂流民をめぐる外交史の研究に貢献することを期待したい。



ISBN 978-4772271554

フィールドから地球を学ぶ：地理授業のための60のエピソード

横山智、湖中真哉、由井義通、綾部真雄、森本泉、三尾裕子 編集

古今書院 2023年3月刊

text: 高倉浩樹

本書は、人類学と地理学の研究者が協力してつくった高校・地理授業のための副読本である。令和4年度から「地理総合」が必修科目になったが、従来の地理に加えて国際協力、地球規模の課題、災害対応などが重点的学習項目とされ、地域研究や人類学の知見が今まで以上に求められている。筆者は「亜寒帯の生活」という章を担当し、シベリア先住民の暮らしを紹介した。本書は、筆者が24期会員を務めた日本学術会議の会合のなかで文化人類学と人文地

理学の研究者が交流をしたことに端を発する。編者の尽力で60にわたるトピックが選ばれ多くの研究者が関わるユニークな図書となった。各章では高校生にむけて質問が投げかけられ、章の文章や写真を通して自ら考えるような作りになっている。地域研究の可能な高大接続の取り組みの好例になったと自負している。本書は日本地理教育学会の第三回出版文化賞を受賞した。

東アジアとイスラーム文明地域における 思想・哲学の比較研究、 及びその学際的、史的展開の解明

志宝 ありむとふて

(マイノリティの権利とメディア研究
連携ユニット／特任助教)



私は、南京大学と東北大学の共同育成博士プログラムを修了し、博士号(哲学)取得後、北京大学・武漢大学における研究職を経て、2014年に日本学術振興会外国人特別研究員に採用され、2017年に東北大学学際科学フロンティア研究所に助教として採用され、現在に至っている。

私の研究課題は、東アジア文明圏における思想・哲学の比較研究、及びその史的展開の解明である。具体的には、①朱子学(宋学)の用語も緩用しながら漢文でイスラームの教理・哲学を説く著述を記した、「回儒」とよばれる中国ムスリム(回民／回族)知識人の思想体系(回儒学)の解明、②中国の思想・哲学(儒学・回儒学等)と江戸時代に独自の発展を遂げた日本の儒学との比較研究、③近代の学知としての中国イスラーム研究史の三点、に大別できる。特に中国イスラーム哲学のテキストである王岱輿や劉智ら回儒の著述にみられる世界観・宇宙観は、儒学中心の伝統的な中国思想の枠組みでは捉えきれない範疇にあることから、近年、中国思想史研究の重要なテーマとして認識されるようになってきている。かかる潮流のなか、私の研究の特徴は、中国イスラーム哲学(①)を主軸にすえながら、中国のみならず、日本の儒学思想との比較(②)までを射程に収め、東アジア世界における思想体系の再構築を目指している点にある。また最近では、東アジ

アにおける近代化の過程で中国ムスリムの存在が日本・中国・欧米でどのように「再発見」され、中国イスラーム研究がいかんして創始・発展してきたのかという学術史の分野(③)にも向かっている。そして、この極めて独創的な着想と視角をもとに研究成果を積み重ねており、かつそれらをウイグル語・漢語・日本語・英語の学術書・学術論文として公表している。まさに「文明間の対話」の実相を実証研究レベルで解き明かさんとする研究構想をもち、その成果を国際的な学術界へ広く発信してきた。活動の一環として、2017年の助教着任後、ただちに「東北大学イスラーム圏研究会」を立ち上げ、これまでに5回の公開講演会、1回の若手中心の研究會を開催した。これは、必ずしもイスラーム研究が盛んとはいえない東北地方において、研究者に定期的な情報交換の場を提供し、研究ネットワークの形成と学術成果の一般への還元に大きく寄与するものである。

現在、東北大学東北アジア研究センターの特任助教及び人間文化研究機構人間文化研究創発センター研究員として勤務する私は、地域研究プロジェクト東ユーラシアプロジェクトの企画立案や運営にも積極的に参与している。

私は、上述のように複数言語で研究成果を発表し、すでに日本・中国の研究者と幅広い研究ネットワークを構築している。そして、オックスフォード

大学イスラーム研究センターで在外研究(2020年2月～2021年11月)を経験し、さらなる研究と国際的にも活躍しようと思っている。そしてこれらの経験の蓄積を活かして、研究のみならず、教育の場においても、国際的な視野から学生の関心を喚起する柔軟で幅広い指導を行っていきたい。



研究成果を取りまとめた出版物

編集後記

客員の受け入れが本格的に再開し、今号の新任紹介は6名となりました。ノーマスクの人が増え、日本はコロナ禍以前の日常に戻りつつあると実感します。一方で世界は不安定化が進み、平穏な日常を奪われる人たちが増え続けています。私達はこれを遠い世界の他人事とせず、何ができるかを考えなければなりません。(後藤章夫)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第99号

2023年12月25日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X (旧Twitter)
をチェック!

